

くらし

健康・医療

ごま

病床記

この春、母が90歳の人生に幕を下ろした。

母は若いころ、とても頭が良く、何をやらしても器用だった。男性に負けない気力を持ち、私たち姉妹には厳しかった。それが10年前、認知症を患い、入院・入所の生活が始まった。

母は書くことが好きで、若いころは、よく日記をしたためていた。先日、「四十九日」を終え、姉が押し入れの中から、さびれた缶を見つけ、ノートを探し出した。

「洋の病床記」と記してあり、入院

市日市

介護職

高木 真理子 53歳

してわずか10日で、わが子を失った母の思い、悲しみがつつつてあった。

母として子どもの死に直面した心の葛藤、夫婦で泣き明かした夜。最後まで奇跡を信じ、祈り通した母の姿が、そこにはあった。白血病だった。

私が生まれる1年前、洋さんという7歳のお兄さんが病死したことは知っていた。ノートは、お兄さんが亡くなった日で終わっていた。日記を読みながら姉妹は泣いた。止めどもなく涙があふれた。

戦争を経験した母であったが、一番つらい思い出だったのだろう。つらい思い出は、心の引き出しに入れたまま逝ってしまったのだ。

今でも、あの病院のあの部屋に行くと、母の笑顔に会えそうな気がする。